蒟蒻本

泉鏡花作

一

如月のはじめから三月の末へかけて、まだしつとりと春雨に成らぬ間を、毎日のやうに凪が續いた。北も南も吹荒んで、戸障子を煽つ、柱を搖ぶる、屋根を鳴らす、物干棹を刎飛ばす　ー　荒磯や、奥山家、都會離れた國々では、尤も熊を射た、鯨を突いた、崇りの吹雪に戸を鎖して、冬籠る頃ながら　ー　東京もまた砂埃の戰を避けて、家毎に穴籠りする思ひ。

意氣な小家に流連の朝の手水にも、砂利を含んで、じりゝとする。

羽目も天井も乾いて燥いで、煤の引火奴に礫が飛ぶと、其のまゝチリ／＼と火の粉に成つて燃出しさうな物騒さ。下町、山の手、晝夜の火沙汰で、時の鐘ほどジヤン／＼打つける、其處も彼處も、放火だ／＼、と取り騒いで、夜廻りの拍子木が、枕に響く

町々に、寝心の扨て安からざりし年とかや。

三月の中の七日、珍しく朝凪ぎして、其のまゝ穏かに一日暮れて・・・・・空はどんよりと曇つたが、底に雨氣を持つたのさへ、頃日の埃には、もの和かに視められる・・・・・じと／＼とした雲一面、星はなけれど宵月の、朧々の大路小路。辻には長唄の流しも聞えた。

此の七の日は、番町の大銀杏とゝもこ名高い、二七の不動尊の縁日で、月六齋。かしらの二日は大粒のあめが、丁ど夜店の出盛る頃に、ばら／＼生暖い風に吹きつけたゝめに　ーー　其の癖すぐに晴れたけれども　ーー　丸潰れと成つた。・・・・・以來、打續いた風ツ吹きで、銀杏の梢も大童に亂れて蓬々しかつた、其の今夜は、霞に夕化棘で薄あかりにすらりと立つ。

堂とは一町ばかり間をおいた、此の樹の許から、櫻草、董、山吹、植木屋の路を開き初めて、長閑に春めく蝶々簪、娘たちの宵出の姿、酸漿屋の店から

幻が點れて、繪草紙屋、小間物店の、夜の錦に、紅を織り込む賑と成つた。・・・・・

が、引續いた火沙汰のために、何となく、心々〳〵のあわたゞしさ、見附の火の見櫓が遠霞で露店の灯の映るのも、花の使と視めあへず、遠火で悟らるゝ思ひがしよう、九時と云ふのに屋敷町の塀に人が消えて、御堂の前も寂寞としたのである。

提灯もやがて消えた。

ひた／＼と木の葉から滴る音して、扱かへし、掬びかへた、柄杓の柄を漏る雫が聞える。其の暗く成つた手水鉢の背後に、古井戸が一つある。・・・・・番町いで古井戸と言ふと、びしよ濡れて、血だらけの婦が、皿を持つて出さうだけれども、別に仔細はない。・・・・・参詣の散つた夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々〳〵あるから、唯思ふと或は其かも知れぬ。

今境内は人氣勢もせぬ時、其の井戸の片隅、分けても暗い中に、恰も水から引上げられた體に、悄乎

と立つた影法師が、本堂の正面に二三本然え殘つた蝋燭の、横曇りした、七星の數の切れたやうに、たよりない明に幽に映つた。

びしや／＼・・・・・水だらけの濕つぼい井戸端を、草履か、跣足か、沈んで踏んで、陰氣に手水鉢の柱に縋つて、其處で息を吐く、肩を一つ搖つたが、敷石の上へ、蹌踉々々。

口を開いて、唇赤く、バツと蝋の火を吸つた形の、正面の鰐口の下へ、髯のもぢや／＼と生えた蒼い顔を出したのは、頬のこけた男であつた。

内へ引く、勢の無い咳をすると、眉を顰めたが、窪んだ目で、御堂の裡を俯向いて、覗いて、

「お蝋を。」

二

然う云つて、綻びて、袂の尖で漸つと繋がる、ぐたりと下へ襲ねた、どく／＼重さうな白絣の浴衣の溢出す、汚れて萎えた綿入のだらけた袖口へ、右の手を、手首を曲げて、肩を落して突込んだのは、賽銭を探つたらしい。

が、チやリ、ともせぬ。

時に、本堂へむくりと立つた、大きな頭の眞黒なのが、海坊主のやうに映つて、上から三寶へ伸懸ると、手が燈明に映つて、新しい蝋燭を取らうとする。

一ツ狭い間を措いた、障子の裡には、燈があか／＼として、二三人居殘つた講中らしい影が映したが、御本尊の前には此の雇和尚唯一人。最う腰衣ばかり袈裟もはづして、早やお扉を閉める處、此の、しよぴたれた參詣人が、びしよ／＼と賽錢箱の前へ立つた時は、ばたりと、團扇にしては物寂しい、大な蛾の音を立てゝ、沖の暗夜の不知火が、ひら／＼と縦に燃える殘んの灯を、廣い掌で煽ぎ／＼、二三挺順

に消して居たのである。

「えゝ、」

と其の男が壓へて、低い聲で縋るやうに言つた。

「濟みませんがね、もし、私持合せがございません。えゝ、新しいお蝋燭は御遠慮を申上げます。えゝ。」

「はあ。」　と云ふ、和尚が聲の幅は押被せるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもぢや／＼と動かして聞返す。

此がために、馨れた男は言澁つて、

「で、ございますから、何うぞ蝋燭はお點し下さいませんやうに。」

「然やうか。」

と、も一つ押被せたが、其のまゝ、遣放しにも出來ないのは、彼が尚だ何か言ひたさうに、もぢ／＼としたからで。

和尚は、まじりと見て居たが、果しがないから、

大な耳を引傾げ状に、ト掌を當てゝ、燈明の前へ、其の黒子を明らさまに出した體は、耳が遠いからと云ふ仕方に似たが、此の際、判然分る　やうに物を言へ、と催促をしたのである。

「えゝ。」

と又云ふ、男は口を利くのも呼吸ぜはしさうに肩を搖る、　・・・・・

「就きましては、眞に申兼ねましたが、其の蝋燭でございます。」

「蝋燭は分つたであす。」

小鼻に皺を寄せて、黒子に網の目の筋を刻み、

「御都合ぢやからお蝋は上げぬやうにと言ふのぢや。御隨意であす。何か、代物を所持なさらんで、一挺、お蝋が借りたいとでも言はるゝ事か、其も御隨意であす。ぢやが、最いう時刻も遲いでな。」

「否、」

「はい、」　と、もどかしさうな鼻息を吹く。

「何でございます、其の、然やうな次第ではございません。其でございますから、申しにくいのでございますが、思召を持ちまして、おを一挺お貸し下

さる事には成りますまいでございませうか。
「ぢやかから、ぢやから御隨意であす。ぢやが時刻も遲いでな、・・・・・見なさる通り、燈明をしめして居るが、それともに點けるであすか。」

「其がでございます。」
と疲れた状に、ぐたりと賽錢箱の縁に兩手を支いて、兩の耳に、すく／＼と毛のかぷさつた、小さな頭をがつくりと下げながら、
「一挺お貸し下さいまし、・・・・・と申しますのが、御神前に備へるではございません。私、頂いて歸りたいのでございます。」

「お蝋を持つて行くであすか。ふうむ、」　と大く鼻を鳴す。
「其も、一度お供へに成りました、燃えさしが願ひたいのでございまして。」
いや、時節がら物騒千寓。

三

「待て、待て、一寸・・・・・」

往來留の提灯は最う消したが、一筋、兩側の家の戸を鎖した、寂しい町の眞中に、六道の辻の通しるべに、鬼が植ゑた鐵棒の如く標の殘つた、縁日果てた番町通なだれた帶坂へ下りようとする角の處で、頬被した半纏着が一人、右側の廂が下つた小家の軒下暗い中から、ひた／／と草履で出た。

聲も立てず、往來留の其の杙に並んで、ひしと足を留めたのは、あの、古井戸の蔭から、よろりと出て、和尚に蝋燭の燃えさしをねだつた、何故、其の手水鉢の柄杓を盗まなかつたらうと思ふ、船幽靈のやうな、蒼しよびれた男である。

纏着は、肩を斜つかひに、つか／／と寄つて、

「待てつたら、待て。」　とドス聲を澁くかすめて、一つしやくつて、頬被りから突出す頤に凄味を見せた。が、一向に張合なし・・・・・對手は待てと云はれたまゝ、破れた暖簾に、ソヨとの風も無い

やうに、ぷら下つた體に立停つて待つのであるから。

「何處へ行く、」

默つて、じろりと顏を見る。

「何處へ行くかい。」

「えゝ、宅へ歸りますでございます。」

「家は・何處だ。」

「市ヶ谷田町でございます。」

「名は何てんだ、・・・・・」

と調子を低めて、ずつと摺寄り、

「恁う言ふとな、大概生意氣な奴は、名を聞くんなら、自分から名告れと、手數を掛けるのがお極りだ。・・・・・俺はな、お前の名を聞いても、自分で名告るには及ばない身分のもんだ、可いか、其の筋の刑事だ。分つたか。」

「えゝ、旦那で在らつしやいますか。」

と、破れ布子の上から見ても骨の觸つて痛さうな、痩せた胸に、ぎしと組んだ手を解いて叩頭をして、

「御苦勞樣でございます。」

「むゝ、御苦勞樣か。・・・・・だがな、餘計な

事を言はんでも可い。名を言はんかい。何てんだ、と聞いてるんぢやないか。」

「進藤延一と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、變に學問をしたやうな、ハイカラな名ぢやねえか。」

と言葉じりもしどろに成つて、頤を引込めたと思ふと、をかしく悄氣たも道理こそ。刑事と威した半纏着は、其の實町内の若いもの、下塗の欣八と云ふ。此は又學問をしなさうな兄哥が、二七講の景氣づけに、縁日の夜は縁起を祝つて、御堂一室處で、三實を据ゑて、頼母子を営む、・・・・・世話方で居殘ると・・・・・お燈明の消々時、フト魔が魅したやうな、髪蓬に、骨豁なりとあるのが、鰐口の下に立顯れ、ものにも事を缺いた、斷るにも一寸口實の見當らない、蝋燭の燃えさしを授けて貰つて、消えるが如く門を出たのを、ト伸上つて見て居た奴。

「棄てゝは置かれませんよ、串戯ぢやねえ。あの、魔ものめ。御本尊にあやかつて、めら／＼と背中に火を背負つて歸つたのが見えませんかい。以來、下

町は火事だ。僥倖と、山の手は靜かだつけ。中やすみの風が變つて、火先が井戸端から舐めはじめた、的切放火の正體だ。見逃して遣つたが最後、直ぐに番町は黒焦さね。私が一番生捕つて、御覽じろ、火事の卵を硝子の中へ泳がせて、追付け金魚の看板をお目に懸ける。・・・・・」

「眞恫、懸念無量ぢやよ。」

と、當御堂の住職も、枠眼鏡を搖ぶらるゝ。

請親が、

「欣八、抜かるな。」

「合點だ。」

四

「あゝ、旨いな。」

煙草の煙を、すば／／と吹く。溝石の上に腰を落して、打坐りさうに蹲みながら、銜へた煙管の吸口が、カチ／／と歯に當つて、歪みなりの帽子が、ふら／／と成る。　・・・・・

夜は更けたが、寒さに震へるのではない、骨まで、ぐな／／に醉つて居るので、唯もすると倒りさうに成るのを、路傍の電信柱の根に縋つて、片手喫しに立續ける。

「旦那、大分いけますねえ。」

膝掛を引抱いて、せめて其にでも暖りたさうな車夫は、値が極つて此から乗らうとする醉客が、一寸一服で、提灯の灯で吸ふのを待つ間、氷の如く堅く成つて、催促がましく脚と脚を、霸柱に摺合せた。

「何？　大分いけますね・・・・・とおいでなさると、お酌が附いて飲んでるやうだが、酒は最う澤

山だ。此の上は女さね。えゝ、何うだい、生醉本性違はずで、間違の無い事を言ふだらう。」

「何ならお供をいたしませう、えゝ、旦那。」

「お供だ？　何處へ。」

「お馴染様でございまさあね。」

「馬鹿にするない、見附で外濠へ乘替へようと云ふのを、ぐつすり寐込んで居て、眞直ぐに遙ばれてよ、閻魔だ、と怒鳴られて驚いて飛出したんだ。お供もないもんだ。此處を何處だと思つてる。　電車が無いから、御意の通り、高い車質を、恐入つて乘らうと云ふんだ。家數四五軒も轉がして、はい、然やうならは阿漕だらう。」

口を曲げて、看板の灯で苦笑して、

「先づ、・・・・・極めつけたものよ。當人恁う見えて、其の實方角が分りません。一體、右側か左側か。」　と、とろりとして星を仰ぐ。

「大木戸から向つて左側でございます、へい。」

「扨は電車路を突切つたな。其のまゝ引返せば可いものを、何の氣で渡つた知らん。」

と眞に成つて打傾く。

「車夫、車夫ツて、私をお呼びなさりながら、横なぐれにおいでなさいました。」

「・・・・・夢中だ。餘程まゐつたらしい。素敵に長い、ぐら／＼する橋を渡るんだと思つたつけ、あゝ、醉つた。しかし可い心持だ。」　とぐつたり俯向く。

「旦那、旦那、さあ、もう召して下さい、・・・・・串戲やない。」

と半分呟いて、石に置いた看板を、ト乘掛つて、ひよいと取る。

鼻の前を、其の燈が、暗がりにスーと上ると、ハツ嚏、醉漠は、細い箍の嵌つた、どんより黄色な魂を、口から拔出されたやうに、ぼかんと仰向けに目を明けた。

「あゝ、待つたり。」

「燃えます、旦那、提灯を亂暴しちや不可ません。」
「貸しなよ、最う一服吸附けるんだ。」
「燐寸を上げまさあね。」
「味が違ひます・・・・・醉覺めの煙草は蝋燭の火で喫むと極つたもんだ。・・・・・だが・・・・・心意氣があるなら、鼻紙を引裂いて、行燈の火を燃して取つて、長羅宇でつけてくれるか。」
と中腰に立つて、煙管を突込む、雁首が、ぼつと大きく映つたが、吸取るやうに、ばつたりと紙に成る。
「消した、お前さん。」
内證で舌打。
霜夜に芬と香が立つて、薄い煙が濛と立つ。
「車夫。」
「何ですえ。」
「・・・・・宿に桔梗屋と云ふのがあるかい、ーー　何處だね。」
「ですから、お供を願ひたいんで、へい、直き其

處だって旦那、御冥加だ。御祝儀と思召して一つ暖、まらしておくんなさいまし、寒くって遣切れませんや。」　と故とらしく、がち／＼。

「雲助め。」

と笑ひながら、

「市ケ谷まで雇つたんだ、賃錢は遣るよ、・・・・車は要らない。其のかはり、蝋燭の燃えさしを貰つて行く。・・・・・」

五

さて醉漢は、山鳥の巣に騒見く、梟と云ふ形で、最一度線路を渡越した、宿の中ほどを格子摺れに伸しながら、染色も同じ、桔梗屋、と描いて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたやうに、横店の電燈が映る、暖簾をさらりと、肩で分けた。よし此處とても武藏野の草に花咲く名所とて、廂の霜も薄化粧、夜半の凄さも狐火に溶けて、情の露と成りやせむ。

「若い衆」

「入しやい！」

「遊ぶぜ。」

「難有う様で、へい、」　と前掛の腰を屈める、

揉手の肱に、ビンと刎ねた、博多帶の結目は、赤坂奴の髯と見た。

「振らないのを頼みます。雨具を持たないお客だよ。」

「丁とな、」

と唐棧の胸を劃つて、

「胸三寸。・・・・・へゝゝ、お古い處、お馴染効でございます、へゝゝ、お上んなはるよ。」

帳場から、
「お客様。」
滿更でない跫音で、丁々と踏む梯子段。
「入らつしやい。」　と・・・・・水へ投げて海津一を掬ふ、撥剌とした聲なら可いが、海綿に染む泡波の如く、投げた齒に舌のねばり、どろんとした調子を上げた、遣手部屋のお媼さんと云ふのが、茶澁に蕎麦切を搦ませた遣放しな立膝で、お下りを這曳いたらしい、さめた饂飩を、くぢ／／と啜る處
ー　横手の衝立が稻塚で、火鉢の茶釜は竹の子笠、唯見ると暖麺蚯蚓の如し、惟れば嘴の尖つた白面の狐が、古蓑を襠裲で、尻尾の褄を取つて顯れさう。
時しも颯と夜嵐して、家中穴だらけの障子の紙が、ばら／／と鳴る、霰の音。　勢辟易せざるを得ずで、客人ぎよつとした體で、足が窘んで、其のまゝ欄干に凭懸ると、一小間拔けたのが、おもしに打たれて、ぐら／／と震動に及ぶ。
「わあ、助けてくれ。」
「お前さん、可い御機嫌で。」
とニヤリと口を開けた、お媼さんの齒の黄色さ。

横に小楊枝を使ふのが、つぶ／＼に入る。
若い衆飛んで來て、腰を極めて、爪先で、つい／＼、
「一寸、此方へ。」
と古疊八疊敷、狸を想ふ眞中へ、性の拔けた、べろ／＼の赤毛氈。四角でもなし、圓でもなし、眞鍮の獅噛火鉢は、古寺の書院めいて、何と、灰に刺したは杉の割箸。
此奴を杖と云ふ體で、客は、箸を別つて、肱を張り、擬勢を示して大胡坐に〓と成る。
「えゝ」と早口の尻上りで、若いものは敷居際に、梯子段見通しの中腰。
「お馴染様は、何方様で　・・・・・へゝゝ、つい、お見外れ申しましてございまして、へい。」
「馴染はないよ。」
「御串戯を。」
「眞個だ。」
「では、其の、へゝゝ、」
「何が可笑しい。」
「否、其の、お古い處を・・・・・お馴染効でございまして、一寸お見立てなさいまし。」

彼は胸を張つて顔を上げた。
「其奴は嫌ひだ。」
「もし、野暮なやうだが、またお慰み。日比谷で見合と申すのではございません。」
「飛んだ見違へだぜ、氣取るものか。一ツ大野暮に我聾、此家のおいらんに望みがある。」
「お名ざしで？」
「惡いか。」
「結構ですとも、お古い處を、お馴染効でございまして。・・・・・」

六

對方は白露と極つた・・・・・桔梗屋の白露、お職だと言ふ。・・・・・遣手部屋の蚯蚓を思へば、什麼か、狐塚の女郎花。　で、此の名ざしをするのに、客は妙な事を言つた。

「若い衆、註文と云ふのは、お照しだよ。」

「へい、」

「内に、居るだらう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりや、無いことはございませんが、」

「祕すな、尋常に顯せろ。」　と眞赤な目で睨んで言つた。

「何も祕します事はございません、ですが御覽の通り、當場所も疾の以前から、恁やうに電燈に成りました。・・・・・ひきつけの遊君にお見違へはございません。別して、貴客様なぞ、お目が高くつて

在らつしやいます、へい、えツへゝゝゝ。最も、其の、些と彼方へ、と成hりまして、お望みとありますれば、」

「だから、望みだから、お照しを出せよ。」

「其は、お照しなり、行燈なり、如何やうともいたしますんで、兎に角、・・・・夜も更けて居ります事、遊君の處を、お早く、何うぞ。」

と、ちらりと遣手部屋へ目を遣つて、此奴、お荷物だ、と仕方で見せた。

「分らないな。」

と煙管を突込んで、ぱつたり置くと、赤毛氈に、ぶく／＼して、擬印傳の煙草入は古池を泳ぐ體也。

「女は蝋燭だと云つてるんだ。」

お媼さんが突掛け草履で、片手を懐に、小楊枝を襟先へ揉插しながら、いけぞんざいに炭取を跨いで出て、敷居越に立つたなり、汚點のある額越しに、じろりと視て、

「遊君が綺臚で柔順しくつて持てさいすりや言種はないんぢやないか。遲いや、ね、お前さん。」

と一ツ叱つて、客が這奴言はうで擡げた頭を、しやくつた臨で、無言で壓着けて、

「お勝どん、」

と空を呼ぶ。

「へーい。」

途端に、がら／＼と鼠が騒いだ。・・・・・天井裏で聲がして、十五六の當の婢は、何處から顯れたか、煤を繫いで、其の天井から振下げたやうに、二階の廊下を、凡そ眠いと云つた佛頂面で、ちよろりと來た。

「白露さん、・・・・・お初會だよ。」

「へーい。」

夢が裏返つた如く、くるりと向うむきに成つて、又ちよろり。

「一旦那此方へ、・・・・・丁どお座敷がございます。」

「待て、」

と一云つたが、遣手の劍幕に七一分の恐怖で、煙

草入を―取つて、やツと立つと、・・・・・まだ―醉つて居る片膝がぐたりとのめる。

「蝋燭は何うしたんだ。」

「何も御會計と―御相談さ。」　と、ずつきり言ふ。・・・・・彼は、―苦い顔で立上つて、―勿論廣くはない―廊下、―左右の―障子へ―突懸るやうに、―若い―衆の背中を睨んでし、―不服らしくずん／＼通つた。

が、―部屋へ―入ると、廊下を背後にして、長火鉢を前に、客を―待つ―氣構への、―優しく―白い手を、しなやかに鐵瓶の蔓に掛けて、見るとも見ないともなく、ト繪本の讀みさしを―膝に置いて、膚薄さうな縞縮緬。撫肩の―懷手、すらりと―袱を、辷らした、紅の襦袢の袖に片手を包んだ―頤深く、―清らな―耳許すつきりと、湯上りの紅絹の―糠袋を皓齒に―噛んだ趣して、―頬も―白々と差俯向いた、黒繻子冷たき雪なす頸、―此が―白露かと、一目見ると、―後姿でゾツとする。　ー

「―河、原、と書くんだ、河原千平。」
やがて、帳面を持つて出直した時、若いものは、軸で、―一寸耳を掻いて、へゝゝ、と笑つた。
「貴客、眞偶の名を聞かして下さいましな。」
犬を―料理さうな―卓子臺の―陰ながら、―膝に置かれた―手は白し、凝と―視られた―瞳は濃し・・・・・・
思はず―情が五―體に響いて、其の時言つた。
「進藤延一・・・・・・―造兵の・・・・・・―技師だ。」

七

「―恁う―云　ふ事をお話し―申した―處で、眞個にはなさりますまい。―第一そんな―安店に、―容色と云ひ氣質と―云ひ、名も白露で況敢ないが、色の白い、美しい婦が―居ると―云つては、それからが嘘らしく聞えるでございませう。

―其の上、癡言を吐け、とお―叱りを―受けようと―思ひますのは、娼妓で―居て、―宛然、―其の婦が素地　の處女らしいのでございます。えゝ、他の仁には先づ兎に角、私だけには眞個でございました。

尚ほ怪しいでございませう・・・・・分けて、旦那方は御職掌で、―人一倍、―疑り深く在らつしやいますから。」　ーー

一言づゝ、―呼吸を吐くと、―骨だらけな胸がびく／／―動く、―其處へ節くれだつた、爪の―黒い―掌を　岸破と當てゝ、―上下に、―調子を―取つて、―聲を揉出す。

—佐内坂の崖下、—大溝通りを折込んだ細路地の—裏長屋、棟割で四—軒だちの—尖端で・・・・・—崖うらの—畝々坂の—引窓から—雪頽れ—込みさうな—掘立一室。—何にも無い、疊の—摺剥けたのがじめ／＼と、蒸れ—濕つた—其の—斑が、陰と—明るみに、黄色に鼠に、雑多の—蟲蝼の—湧いて出た形に見える。—葉鐵落しの灰の—濡れた箱火鉢の—縁に、じり／＼と燃える陰氣な蝋燭を、舌のやうになめらかして、悄乎と蒼ざめた、髪の毛の蓬なのが、此の—小屋の・・・・・ぬしと言ひたい、—墓から—出た—状の進藤建一。

がつしと—又胸を絞つて、

「でありますが、餘りお疑ひ深いのも—罪なものでございます。」

と、もの—言ふ都度、—肩から暗く成つて、蝋燭の灯に—目ばかりが—希代に—光る。

「—疑ふのが—職業だつて、そんな、お—前、—狐の—性ぢやあるまいし、—第一、—僕は其のね、何も—本職と云ふわけぢやないんだよ。」

と—何故か弱い音を吹いた・・・・・—其向ひをずり—下つて、—割膝で—畏つた—半繻着の—欣八刑事、風受けの可い、勢に乗じて、土蜘昧の穴へ—探入に—及んだ列卒の形で、肩ばかり聳やかして—弱身を—見せじと、擬勢は示すが、—川柳に曰く、鏝塗りの—形に動く雲の峰で、—蝋燭の影に—蟠る—魔物の目から、—身體を遮りたさうに、下塗の本體、—頻に—手を—振る。　・・・・・

「可いかね、一寸岡引ツて、身輕な、—小意氣な—處を勤めるんだ。—此のお—前、しつきりなし—火沙汰の—中さ。お—前、燒跡で引火奴を—捜すやうな、變な事をするから、一つ素引いて—見たまでのもんさね。—直ぐにも打縛りでもするやうに、お前、—眞劍に—成つて、—明白を—立てる／＼ツて—言はあ。—勿論、何だ、御用だなんて威かしたには威しましたさ、そりや—發奮と云ふもんだ。

明白を—立てます—立てますツて、—此處まで—連れて—來るから、途中で—小用も—出來ずさね、早い話が。

—隣家は空屋だと—云ふし、・・・・・」
と、頬被のまゝで、後を—見た、—肩を引いて、
「一軒隣は按摩だと—云ふぢやねえか。—取附きの—相角がおでん—屋だツて、くわツと飲んだやうに一—景氣附いたと—思や、夫婦で夜なしに出て、留守は小兒の番をする—下性の惡い—爺さんだと言はあ。早い話がぢや、此の一棟四—軒長屋の—眞暗な—圃體の中に、・・・・・」
と鏝を塗つて、「まあ、—可やね、お前、—別にお—前、怪しいたツて、何も、ねえ、まあ、お—互に—人間に變りはねえんだから、すぐに然やうならにしようと思つた。だけれど、—話の口明が、宿の女郎だ。おまけに—別嬪と來たから、早い—話が。でまあ、—其の何だ、私も—素人ぢやねえもんだから、」
と目潰しの灰の—氣さ。
「—一ツ詮索をして歸らう、と居坐つたがね、・・・・・—氣にしなさんな。—別にお—前の身體を裏返しにして、綺麗に洗ひだてをしようと云ふんぢやねえ。可いから、」

と云ふ―中にも、じろりと視る、そりや光るわ、で鏝を―塗つて、

「―大目に見て遣ら。ね、早い話が。―僕は歸るよ、―氣にしなさんな。」

「えゝ、―否、―私の方で、氣にしない―次第には―參りません。」

欣八、ぎよつとして、

「―然うかね、・・・・・はてね。・・・・・・トオカミ、エミタメはどんなものだ。」　と字は孔明―琴を彈く。

八

「で、—其の初會の晩なぞは、見得に—技師だつて—言ひました。が、私は其の—頃、小前川へ—勤めました—鐵砲組でございますが、」

「あゝ、—造兵かね、—私の友達にも四五人居るよ。中の一人は、今夜もお不動様で一所だつけ。然うかい、—其奴は頼母しいや。」　と欣八—聊か—色を直す。

「見なさいます—通りで、我ながら—早や恁やうに—頼母しくなさ—過ぎます。最も、—車夫の—看板を引拔いて、肩で暖簾を分けながら、遊ぶぜ、なぞと—醉つた—晩は、そりや—威勢が可うがした。」

と投首しつゝ、又吐息。ぢつと灯を瞻つたが、

「—處で、肝心の—其の—燃えさしの—蝋燭の事でございます。

—嘘か、眞かは分りません。—豫て、牛鍋のじは〳〵酒に、—夥間の—友だちが話しました事を、

ーー　其の―大木戸向うで、蝋燭の―香を、―芬と醉爛れた、此處へ、―其の腦へ差込まれましたゝめに、ふと好事な―心が、―火取蟲と云つた形で、―熱く―羽ばたきをしたのでございます。

内には―柔しい女房もございました。―別に―不足と―云ふでもなし、・・・・・宿へ入つたと云ふものは、唯蝋燭の事ばかりでございますから、壓附けに、勝手な婦を―取持たれました時は、―馬鹿々々／＼しいと思ひましたが、因果と其の―婦の―美しさ。

成程、桔梗屋の白露か、―玉の―露でも―可い―位。

けれども、―樓なり、―場所柄なり、・・・・・餘り綺麗なので、―初手は―物凄かつたのでございます。が如何にも、其の病氣があるために、　ーー　此の容色、三絃も―一寸響く腕で　ーー　蹴ころ―同然な掃溜へ落ちて居ると分りますと、一―夜妻の―此の―美レいのが・・・・・と思ふ―嬉しさに、・・・・・―今の―身で恥も、―外聞もございません。―筋も―骨もとろ／＼と蕩けさうに―成り

ました。　……

枕頭の―行燈の―影で、えゝ、―其の―婦が、二―階廻しの手にも投遣らないで、―寝巻に着換へました―私の結城木綿か―何か、ごつ／＼したのを、―絹物のやうに優しく放つて、袖疊にして居たのでございます。

部屋着の腰の―巻帶には、破れた行燈の―穴の―影も、蝶々のやうに見えて、ぞくりとする肩を―小夜具で―包んで、―恍惚と―視めて居ますと、疊んだ袖を、一つ、スーと扱いた―時、―袂の―端で、指尖を留めましたがな。

横顔がほんのりと、濡れたやうな目に、―柔かな眉が―見えて、

「　ー　貴方は御存じね　ー　」

―延二は―繕け―状に三つばかり、しやがれた咳して、

「私に、―殘らずｎ自分の事を知つて居て來たの

だらうと—申しまして、　ーー　—頂かして下さいましな、手を—入れますよ、大事ござんせんか　ーー
と—念を押して、—其の袂から、拔いて取つたのが、—右の—蝋燭でございます。」

「へい、」　と—欣八は這身に—乘出す。

「が、其の—美人。で、玉で—刻んだ—獨鈷か—何ぞ、—尊いものを—持つたやうに見えました。
—遣手も—心得た、成りたけは隱す事、それと言はずに—逢はせた、と—恁う—私は思ふ。　・・・・・・
ーー　何方の御蝋でござんすの　ーー
又、然う訊くのがお—極りだと—申します。・・・・・三度のもの、湯水より、—蝋燭でさへあれば、と云ふ—中にも、—其の—婦は、新のより、燃えさしの、其の—燃えさしの香が、—何とも—言へず快い。

—其の—燃えさしもでございます。
一度、神佛の前に供へたのだ、と持つ—手もわなゝく、—體を—震はして—喜ぶんだ、と—豫て聞いて

—居りましたものでございますから、其の晩は、—友達と銀座の松喜で牛肉をしたゝか遣りました、—其の口で、

ーー　水天宮様のだ、—人形町のーー

と申したでございます。電車の方角で、フト—思ひ付きました。銀座には—地蔵様もございますが、一言で、—誰も分るのをと思ひましてな。えゝ。・・・・・」

とじろ／＼と四邊を瞻す。

—欣八は同じやうに、きよろ／＼と—頭を振る。

九

「お―聞き―下さい。」

と―痩せた―膝を痛さうに、―延一は居直つて、

「豫て噂を聞いたから、おいらんの土産にしようと思つて、水天宮様の御蝋の燃えさしを頂いて來たんだよ、と―申しますと、端然と居坐を―直して、―其のふつくりした乳房へ響くまで、身に染みて、鳩尾へはつと―呼吸を引いて、

ーーまあ、―嬉しい　ーー

と丁と取つて、―蝋燭を―頂くと、然も其の尊さに、生際の曇つた―白い額から、品物は―輝いて後先が―射すやうに―思はれる、と申すものは、―婦の氣の入れ方でございまして。

何うでございませう。此が直き近所の車夫の看板から、―今しがた煙草を―吸つて、酒粘りの唾をいた火の灯いて居た奴ぢやございますまいか。

なんぼでも、然うまで眞へに成つて嬉しがられては、灰吹を叩いて、舌を出すわけには參わません。

實は、と其の趣きを陳べて、堪忍しな、出來心だ。其のかはり、今度は成田までもわざ／＼出向くから、と申しますと、婦が莞爾して言ふんでございます。

此ほどまでに、生命がけで好きなんですもの、何處の、何うした蝋燭だか、大概は分ります。　一度燃えたのですから、其の香で、消えてから何のくらゐ經つたかゞ知れますと、伺つた路咽で、下谷だが淺草だが推量が付くんです。唯今下すつたのは、手に取ると、すぐに直き近い處だとは思ひました、・・・・・では、大宗寺樣のかと存じましたが、召上つた煙草の粉が附着いて居ますし、御縁日ではなし、かた／＼惡戯に、お欺ぎだとは知つたんですが、お初會の方に、お怨みを言ふのも、我儘と存じて遠慮しました。今度ツからは、たとひ私をお誑しでも、蝋燭の嘘を仰有ると眞個に怨みますよ、と優しい含聲で、ひそ／＼と申すんで。

最う、實際嘘は吐くまい、と思つたくらゐでございます。

部屋着を脱ぐと、緋の襦袢で、素足がちらりとすると、ふツ、と行燈を消しました。・・・・・底に温味を持つたヒヤリとするのが、酒の湧く胸へ、今にもいゝ薫で颯と絡はるかと思ふと、然うでないので　ーー

カタ／＼と暗がりで箪笥の抽斗を開けましたがな。ーー　水天宮様のをお目に掛けませう　ーー

然う云つて、柔らかい膝の衣摺れの音がしますと、燐寸を二と摺つた。」

「はあ、」

と欣八は、其の二とした・・・・・瞬きする。

「で、朱塗の行燈の臺へ、蝋燭を一挺、燃えさしのに火を點して立てたのでございます。」

と熟と瞻る、と此處の蝋燭が眞直に、細りと灯が据つた。

「寂然として居りますので、尋常のぢやない、何となく其の暗い灯に、白い影があるらしく見えました。

此は、下谷の、此は虎の門の、飛んで雄司ケ谷のだ、いや、つい大木戸のだと申して、油皿の中まで、十四五挺、一ツづゝ消しちや頂いて、それで一ツづゝ、生々とした香の、煙・・・・・と申して不思議にな、一つ色ではございません。稲荷様のは狐色と申すではないけれども、大黒天のは黒く立ちます・・・・・氣がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇つた淺黄がございましたり。

其の燃えさしの香の立つ處を、睫毛を濃く、眉を開いて、目を恍惚と、何と、香を散らすまい、煙を亂すまいとするやうに、掌で蔽つて餘さず嗅ぐ。

此か藥なら、身體中、一筋づゝ黒髪の尖まで、血と一所に遍く膚を繞つた、と思ふと、くすぶりもせずに尚ほ冴える、其の白い二の腕を、緋の袖で包みもせずに、・・・・・」

聞く欣八は變な顔色。

「時に・・・・・」

と延一は、ギクリと胸を折つて、抱へた腕なりに

我(わ)が膝(ひざ)に突伏(つゝぶ)して、かツ／＼と咳(せき)をした。

十

其の瞼に朱を濯ぐ・・・・・汗の流るゝ額を拭つて、

「・・・・・時に、其の枕頭の行燈に、一挺消さない蝋燭があつて、寂然と間を照して居りますんでな。

ーー　彼は　ーー
ーー　水天宮様のお蝋です　ーー
と二つ並んだ其の顔が申すんでございます。幻の影には何が映るとお思ひなさる、・・・・・氣に成こと夥しい。

ーー　消さないかい　ーー
ーー　堪忍して　ーー

是非と言へば、さめ／＼と、名の白露が姿を散らして消えるばかりに泣きますが。推量して下さいまし、愛想盡しと思ふがまゝよ、鬼だか蛇だか知らない男と一つ處・・・・・せめて、神佛の前で輝いた、

あの、光一ツ暗に無うては恐怖くて死んで了ふのですもの。もし、氣に成つたら、貴方ばかり目をお瞑りなさいまし。　ーー　と自分は水晶のやうな黒目勝のを、すつきり〓崢つて、ーー　晝さへ遊ぶ人がござんすよ、と云　ふ。

可し、神佛もあれば、夫婦もある。蝋燭が何の、と思ふ。其の蝋燭が滑々〳〵と手に觸る、・・・・・扱帶の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも、幾本となく忍ばしてあるので、ぎよつとしました。　蹴らず、一度は神佛の目の前で燃え輝いたのでございませう、・・・・・中には、口にするのも憚る、荒神も少くはありません。

ばかりでない。果ては、其の中から、別に、綺麗な繪の蝋燭を一挺拔くと、其へ火を移して、銀簪の耳を透す。先づ何うするとお思ひなさる、・・・・・後で聞くと此の蝋燭の繪は、其の婦が、隙さへあれば、自分で刺青のやうに縫針で彫つて、彩色をするんださうで。其は見事でございます。

又髪は、何十度逢つても、姿こそ服装こそ變りますが、何時も人がらに似合はない、あの、仰向けに結んで、緋や、淺黄や、絞の鹿の子の手柄を組んで、黒髪で卷いた芍薬の莟のやうに、眞中へ簪をぐいと挿す、何轉進とか申すのにばかり結ふ。

何と繪蝋燭を熱したのを、簪で、其の髷の眞中へすくりと立てゝ、鳥羽玉の黒髪に、ひら／＼と篝火のひらめくなりで、右にも成れば左にも成る、寢返りもするのでございます。

ーー　恁うして可愛がつて下さいますなら、私や死んでも本望です　ーー

と此で見るくらゐ又、白露の其の美しさと云つてはない。が、如何な事にも、心を鬼に、爪を常に、狼の牙を噛鳴らしても、森で丑の時參詣なればまだしも、あらたかな拝殿で、巫女の美女を虐殺しにするやうで、笑靨に指も觸れないで、冷汗を流しました。

……

それから惱亂。

因果と思切れません・・・・・が、

ーー　まあ嬉しい　ーー

と云ふ、あの、容子ばかりも、見て生命が綫けたさに、實際、成田へも中山へも、池上、堀の内は申すに及ばず。　ーー　根も精も續く限り、蝋燭の燃えさしを持つては通ひ、持つては通ひ、身も裂き、骨も刷りました。

昏んだ目は、晝遊びにさへ、其の灯に眩しいので。

ーー

手足の指を我と折つて、頭髪を掴んで身悶えしても、婦は寝るのに蝋燭を消しません。度かさなるに從つて、數を増し、燈を殖して、部屋中、三十九本まで、一度に、神々〳〵の名を輝かして、そして、黒髪に繪蝋燭の、五色の簪を燃して寝る。

其の媚かしさと申すものは、暖かに流れる蝋燭より前に、見るものゝ身が泥に成つて、熔けるのでございます。忘れません。

因果と業と、早や此の體に成りましたれば、揚代處か、宿までは、杖に縋つても呼吸が切れるのでございませう。所詮の事に、今も、婦に遣はします氣で、近い處の縁日だけ、蝋燭の燃えさしを御合力に預ります。即ち此でございます。」

と袂を探つたのは、こゝに灯したのは別に、先刻の二七の其であつた。

犬の頬に吠ゆる時　一一

「で、扨此を何にいたすとお思ひなさいます。懺悔だ、お目に掛けるものがある。」

「大變だ、大變だ。何だつて和尚さん、奴も其までに成つたんだ。氣の毒だと思つて其の女がくれたんだらうね、緋の長絹袢を何うだらう、押入の中へ人形のやうに坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云ふと、やがて人くらゐの大きさに、何十挺だか蝋燭を固めて、つるりと失張蝋を塗つて、細工をしたんで。そら、燃えさしの處が上に成つてるから、ぽち／＼黒く、女鳴神ツて

頭でさ。色は白いよ、凄いよ、お前さん、蝋だもの。

私あ反つたねえ、押入の中で、ぼうとして見えた時は、　ーー　其をね、しな／＼と引出して、膝へ横抱きにする・・・・・と何うです。

缺火鉢からもぎ取つて、其の散髪見たいな、蝋燭の心へ、火を移す、ちろ／＼と燃えるぢやねえかね。

と舌は赤いよ、口に締りをなくして、奴め、ニコ／＼としながら、又一挺、最う一本、だん／＼と火を移すと、幾筋も、幾筋も、ひよろ／＼と燃えるのが、搦み合つて、空へ立つ、と火尖が伸びる・・・・・恁う成ると可恐しい、長い髪の毛の眞赤なのを見るやうですぜ。

見る／＼、お前さん、人前も構ふ事か、長橋袢の肩を兩肱へ卷込んで、汝が着るやうに、胸にも脛にも搦みつけたわ、裾がずる／＼と疊へ曳く。

自然とほてりがうつるんだつてね、火の燃える蝋

燭は、女のぬくみだツさ、奴が言ふ、・・・・・可うがすかい。
頬邊を窪ますばかり、齒を吸込んで附着けるんだ、串戯ぢやねえ。

や丶少時、魂が遠く成つたやうに、靜として居ると思ふと、襦袢の灯が颯と冴えて、搖れて、靡いて、蝋に紅い影が透つて、口惜いか、悲いか、可哀なんだか、ちら／＼と白露を散らして泣く、そら、とろ／＼と煮えるんだね。嗅ぐさ、お前さん、べろ／＼と舐める。目から蝋燭の涙を垂らして、鼻へ傳はらせて、口へ垂らすと、せい／＼肩で呼吸をする内に、ぶる／＼と五體を震はす、と思ふとね、横倒れに成つたんだ。さあ、七顛八倒、で沼見たいな六疊どろ／＼の部屋を　轉摺り廻る・・・・・炎が搦んで、育蜥蜴の〓打つやうだ。

私あ夢中で逃出した。　ー　突然見附へ駈着けて、火の見へ駈上らうと思つたがね、まだ田町から火事も出ずさ。
何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越して居るんだね。」

お不動様の御堂を敲いて、夜中に此の話をした、下塗の欣八が、

「だが、いゝ女らしいね。」

と、後へ附加へた料簡が惡かつた。

「欣八、氣を附けねえ。」

「顔色が變だぜ。」

友達が注意するのを、アハゝ、と笑消して、

「女がボーツと來た、下町ア火事だい。」　と威勢よく云つて居た。が、ものゝ三月と經たぬ中に此のべらぼう、唯一人の女房の、寝顔の白い、緋手柄の圓髷に、蝋燭を突刺して、じり／＼と燃して火傷をさした、其から發狂した。

但し進藤とは違ふ。陰氣でない。縁日とさへあれば何處へでも押掛けて、鏝塗の變な手つきで、來た／＼と踊りながら、

「蝋燭をくんねえか。」

怪むべし、其の友達が、續いて　ーー　また一人。・・・・・・

【完】